

パキスタン・カラシュ族の民族調査<抄>

著者	菅原 篤
雑誌名	基礎科学論集 : 教養課程紀要
巻	1
ページ	47_a-56_a
発行年	1983
URL	http://doi.org/10.18924/00000049



パキスタン・カラシュ族の民族調査 <抄>

菅 原 篤

○インド亜大陸の西北部にアジアで最も変化にとんだ山脈が出あっている。ヒンズークシュであり、パミールであり、カラコラムである。この地域には中国西部、中央アジア、イランそしてインドの異なった人種のグループが集まっており、いわば多種民族のルツボと言ってよい。

パキスタン北西辺境州 N. W. F. P の北部は、ダルデイスタン Dardistan と呼ばれ、古くからチトラル Chitral, フンザ Funza, ギルギット Gilgit そしてバルチスタン Baltistan 地区から構成されている。

さて、本論でとり上げようとしているカラシュ ⁽¹⁾ Kalash 族は、アフガニスタンの東部から、パキスタンの西北部一帯の山峡地帯に定住している「山の民」である。⁽²⁾

(1) イスラム教徒たちはかれらを **Kafirs** と呼び「異教徒」としての差別をしている。

(2) 定住地は海拔 2,000 m の急斜面であり、高山型経済の典型をなしている。

カラシュという言葉はイスラム侵入以前からあったもので、文献及び伝承では **Kāshkar** とか **Khasa** と呼ばれ、又唐代にも羯師迦舎という名で伝わっている。

1895年の英国・アフガニスタン戦争の結果、かれらの居住圏はパキスタン(英領インド)とアフガニスタンとに分断され、⁽³⁾ 1898年ごろには、アフガニスタンのカフィーを半強制的にイスラムに改宗させ、別に **Nuristan** = 光の国という美称をおくっている。いずれにしても、この種族の定住圏は、山峡部にあるのかかわらず、古来より、「文明の十字路、シルクロードの一角を占め、その意味で重要である。たとえば、北進しバロギル峠 **Baroghil. p** を越えてワハン回廊に。東はシャンドウル峠 **Shandur. p** を越えてカシミールへ。南は

ラワリ峠 Lawari. p からスワーへと容易にぬけられる。

その中心的居住圏は本来「点」的な小集団集落であるが、アフガニスタンのジャララバード Jalalabad に発するクナール河 Kunar. r 沿いに発展した「線的、孤立集団」としてとらえることができよう。⁽⁴⁾

(3) (4) Kunar. r の支流ごとに細分化された集団があり Kati 語, Wigar 語 Ashukuni 語などの言語圏を形成している。本論でのべる地区は Jalalabad から北東に約 200 km 上流のパキスタン領内のカラシュ族である。

○カラシュの人々はその土地を Kalalasha-desh と呼び、三つの谷間に住んでいる。⁽⁵⁾

カラシュとチトラルの伝承を調べると、かつてチトラル周辺部にまで勢力圏を広げたこともあった。

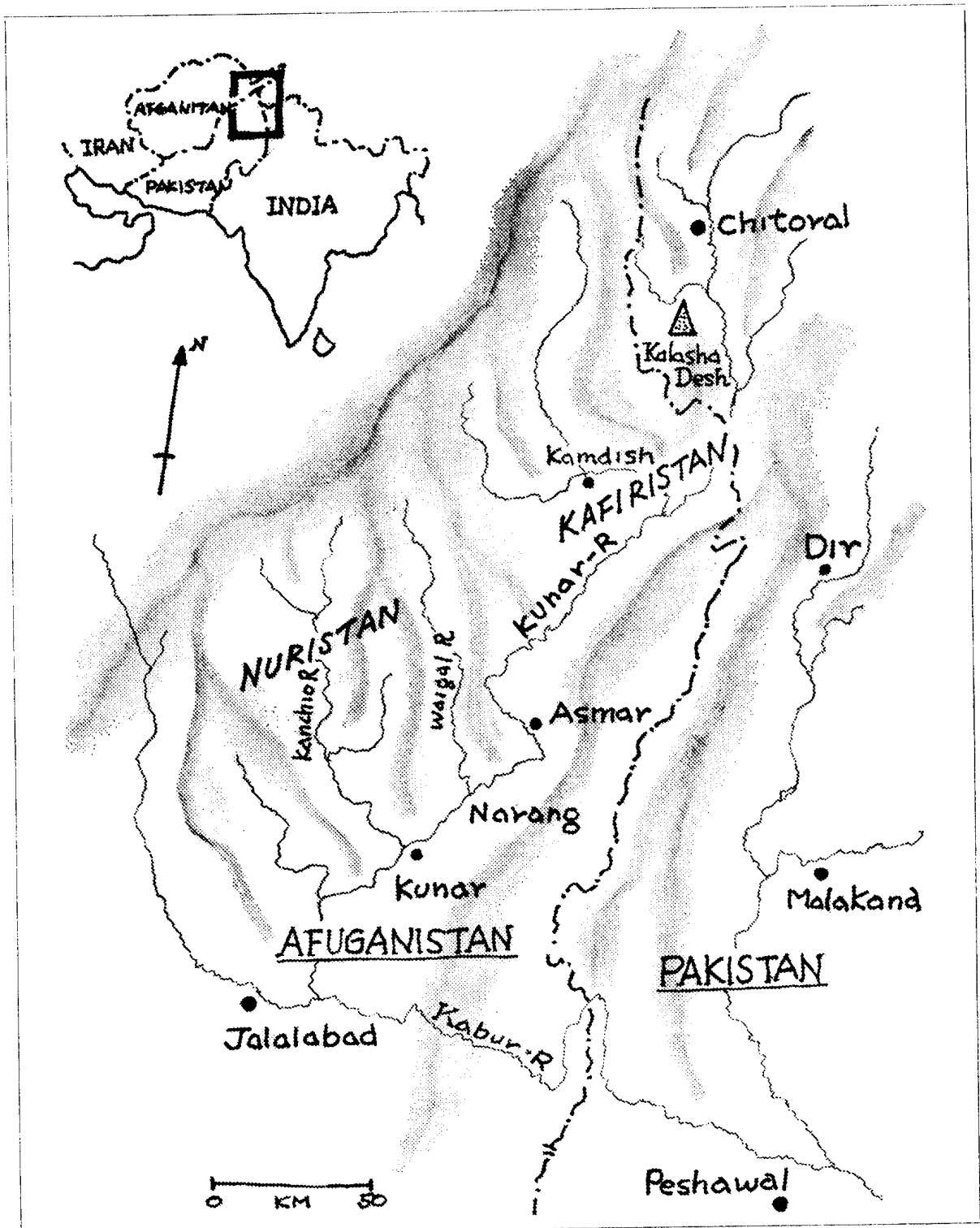
そのカラシュ族も現在伝わっている祭文や歌詩に表現されている地名をたずねると、クナール河下流の一支流、ワイガル Waigal 溪谷から移動したことを伝えている。

とくに10世紀から11世紀にかけてアフガニスタンの南西、ガズニ王朝 Gazni のマフムドはかなり徹底した異教徒改宗政策を行いクナール河沿いのカラシュ人もしだいに奥地においやられた。⁽⁶⁾

(5) パキスタン チトラルの南方にあるランボール谷 Ramboor, バンボレート谷 Bamborait, それにビリー谷 Birir である。

(6) Israr-ud-din "Social Geography of Chitral State" (Peshawar University) より。

○さてカラシュの性質は山峽種族にありがちな偏狭、傲慢、狂暴といった性行は少なく、どちらかと言えば温厚、聡明である。グハー博士 Dr. B. S Guha はその著『Races of Northern India』の中で、「原ノルディック Proto-Nordic Styly」に属するといい、顔色・肌色の白さをはじめ陽気で機智にとみ、寛大で祝いごとが好きで、人生を楽しくすごすことを十分心得ていることを指摘している。



○それでは今対象にしているパキスタン領内のカラシュ族についての社会機構を概観してみよう。（図中 Chitral の南の▲印）

ここは前述のとおり、もっともイラムス化が進まなかった地区であり，Ka-

lash=貧しい人の代名詞におきかえられるのにもっとも適合している。しかし、同時に原カラシュ **Prot Kalash** の民族生態をもっともよく伝えているといっている。

この地区のカラシュの人口は約20の集落からなり、一つのムラにはほぼ50家族、そして1戸の構成員は平均7名である。⁽⁷⁾

どのムラでも長老が祭事と裁判権をにぎり、生まれながらにして出自集団の一員となっている他の人々は、‘長老会議’の決定によって行動する。しかし、一般社会にみられるような統治下に服従する、といった権力構成はみられず、氏族 **Kuran** の秩序を保つていどに協調的である。つまり日中は全員一致して働き、日が暮れると又集団のリクリエーションがくりかえされる、といった連続である。

(7) クナール河支流全体のカラシュ系の人口は推定6万～8万人と考えられ、約13,000km²の地域内に常住している。

○カラシュの集団は自然な家父長的なものである。女性は家庭の家事に主点をおいている。男性は農耕と移牧を随時行い、女性の戸外労働は、灌漑用水路の清掃・修理、段々畑の穀物栽培に責任をもつ。⁽⁸⁾

各ムラには **Asakal** という村長制をしき、説得力のある者が選ばれるが、これが長老会議と一致する点が多い。

かれらは政治的国家集団という考えは持っていない。19世紀のチトラルに從属していた時は、僅かな税金を払っていたが、いぜん自治独立の意図はなく、慣習のおもむくままに過ごした。それは強制的な外圧統治に対する拒絶反応を常に持っていたことを意味している。

(8) オオムギ、雑穀、トウモロコシ、コムギの植付、除草、給水ののち初秋に収穫する、一筆あたりの面積が狭いため、スキを用いるほどの広さがない。一方ヤギ・ウシ・ヒツジの放牧は男性の義務で季節移動は春に始まる。放牧地の高度、起伏、植生からヤギがほぼ90%を占めている。

○カラシュのムラは一見ハチの巣のようである。屋上屋をかけるといった急傾

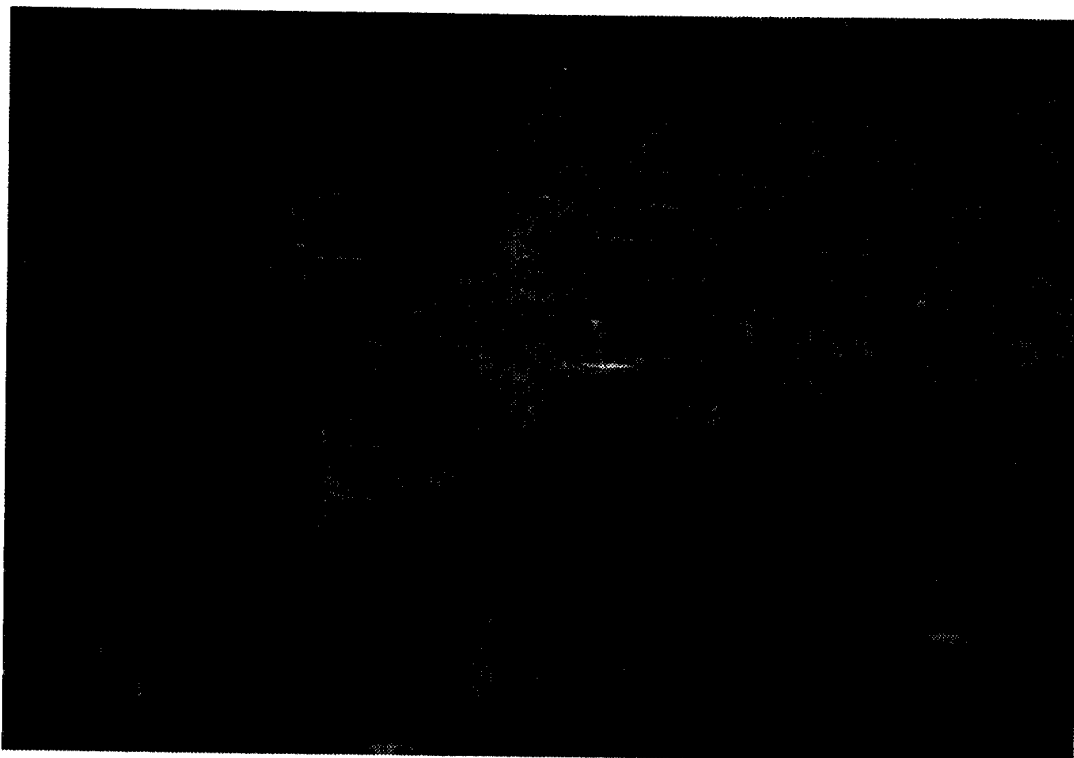
斜面に重なった集落をつくる。平均的家屋のプランは単調で家の中央に炉がしきられ、周りを4～5に仕切った部屋が配される。正面ドアのつきあたりは道具類、その左右には、母親と幼児。そして父親と子ども達の部屋がある。ドアに近い仕切りの空間には燃料と穀物。それに採乳のヤギの小屋が同居している。

室内は木造主体の構築にもかかわらず開放部が極度に少なく、日照・通風が悪く、衛生的に不備な面が多い。家畜と同居、冬季間密閉、加えて身体の洗浄がわるいため、悪臭がたちこめている。又、人畜に害する南京虫やノミも多く、衛生観念が近代化を著しく阻害しているように思われる。

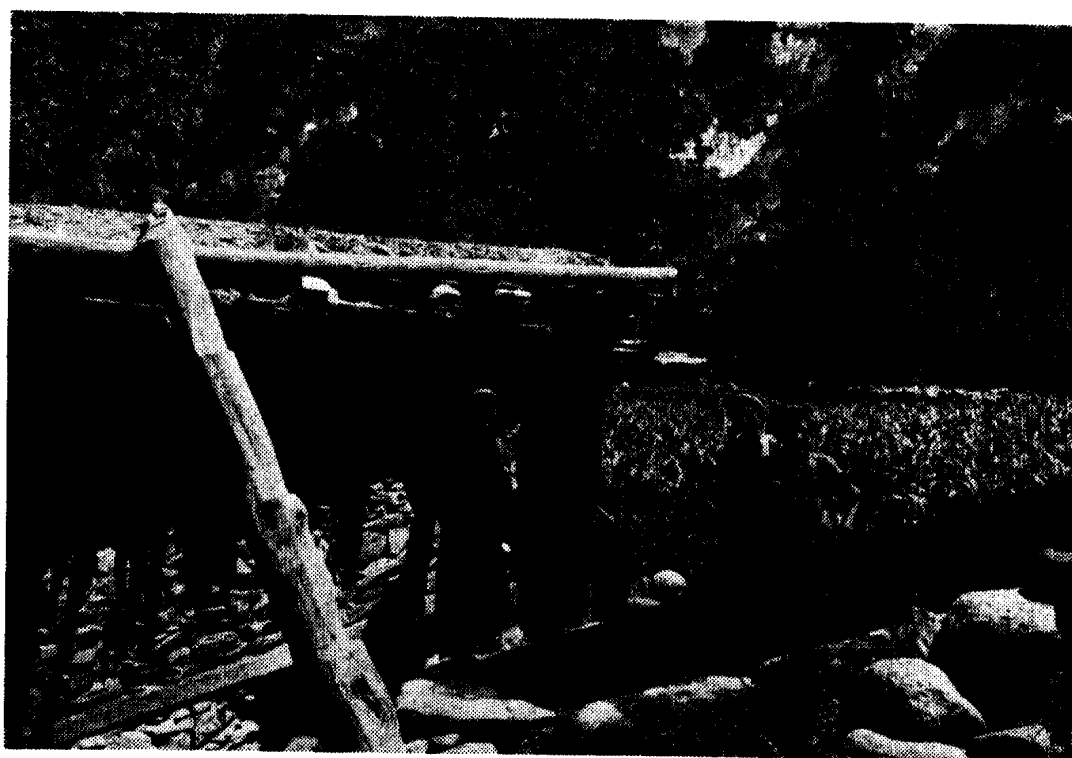
○カラシュの人たちの生活経済を支えている土地の大部分は、カラシュ以外の所有になっている。平均的耕地所有面積は1戸当たりせいぜい1エーカーで、あとは小作農としての労働が大部分である。家畜としてのヤギは大きな収入源である。しかし、1戸当たり12頭ほどではその零細ぶりが明らかである。

したがって食事は常に貧しく、祭事の外はマトンやトリなどの肉は食べない。ヤギの乳加工品であるチーズとバター（Ghee）が最高のタン白源で、それに乾燥果実（例アンズ・クルミ）や木の実。そしてわずかな野菜をとる。主食の観念は貧しくコムギ、オオムギ、メイズ（インドトウモロコシ）を粉状にして焼物 Nān 又は粥として食べる。その他喫茶の風はなく、果物はブドウ、リンゴ、アンズ、クルミが中心である。

○カラシュの人々をみてもっとも注意をひく特徴は婦人たちの服装である。もっとも表にあらわれている毛織のコートは、それが幅広く、肩から膝までたっぷりおおわれるようになっている。このコートは一様に黒色で、冬期にはヤギの手織によるシマ模様のショールを被る。またおどろくべきことにはこのコートは昼夜をへだてず、年中着用され、着つぶれるまで着がえない。そして墓の中にまでさえこのコートをぬごうとしない。隣接しているイスラムの婦人風俗がヴェールをかぶり、遮断的な性質を持っているのに対し、頭飾りから首飾りまでこれでもかと思われるほど白いアコヤ貝や赤い玉石でおおわれる。



㊤ カラシャディシュの集落



㊦ カラシュの水車小屋と男女

この頭飾りはその頂部がコブラ模様であるとの説があるほど特徴がある。⁽⁹⁾
 少女たちは髪をおさげにし、鈴をさげている。この飾りも毒蛇をさけるものと解釈している。

(9) I, J. Afghani は男性もかつてはこのような頭飾りをつけていたという。蛇＝NĀGA に対する崇拝はインド古代文化の影響であり、かつてムギワラで蛇の飾りをつくり胸につけたと伝えている。

『The Kalash Society of Chitral』。

○カラシュの宗教は、素朴ながら一神教である。それはインドのヴィシュヌ神にあらわれた宇宙の創造神と維持神とを統一した神観念の影響を思わせる。しかし、身近には神聖なコムギ粉でつくった象神が家族神であり、チトラマス祭 Chitarmas の中心になる。これもヒンドウ教のガネーシャ象神と同規でありカラシュの言語がインド語系であることと共にチェックされるべきである。かれらは俗信である山の妖精をことのほか信じている。イスラムのジン Zin = 妖精のように善神になって人に好意をよせることもある。また人を悪い行いにさそう悪魔を信じている。ただ靈魂の不滅は信じているが、死後の世界は全く信じていない。したがって天国・地獄へのアプローチもまったく問題にしていない。

家庭の神 Jastakan はカラシュの人たちに最も密着した神である。冬季に行う祭事や舞踊の場所も Jastakan とよぶ。その構造物は、約12m×12m平方の丸太小屋で戸口の扉には花模様が彫刻されている。内部のホールの壁にもヘビやヤギの模様が刻まれ、黒色のウマやヤギを絵で表わすこともある。四角の柱もかれらが極めて得意とする木彫で飾り、この祭場、つまり Jastakan が年中行事の中で最も重要なものであることを示している。⁽¹⁰⁾

(10) もちろん儀式にかかせない踊り、食事もこの祭場で行われ、太鼓が主楽器になる。

カラシュの中のいくつかのムラでは、マハンデオ神 Mahandeo の野外の祠もある。⁽¹¹⁾ 祠には石の土台があり、その上に木の箱があり中に木彫の馬を置く。

そして近くに木のベンチがあり、そこに打ちつけた板には、過去の犠牲の記念がのこされている。かれらはヤギを犠牲とするが、その瞬間に神が降臨して、ヤギの血をすする——と信じている。その時かれらは、近くに來た神から幸運を引き出そうとするわけである。

(11) 別名 **Malosh** ともいう。祭壇と訳してもよいだろう。

さて、このような祭事を執行するのは、前述の長老たちが基盤になるが、その直接担当者はデハール **Dehar** と呼ぶ宗教リーダーである。**Dehar** はふだんは通常の生活をしていて、祭事、特に犠牲祭や結婚式には職能を発揮する。**Dehar** は世襲制でもなく、技術学習の習得者でもない。一番重要なのは、神事に際して「神がかり、状態になれることである。例えば犠牲祭の時には、ヤギの血を聖火にそそぐ際、一時神がかりになり、ムラの未来の繁栄を神託として表わさなければならない。また結婚式にも特殊なお神酒をつくり、家庭内のトラブルや病気の除去や、共同体の祝福の祈願を神にかわって表わす役となる。

○カラシュの人たちは祭りが好きである。すべての祭りは季節の変化にかかわっている。例えば①チャモス祭・チトラマス祭 **Chamoos・Chitarmas** は12月18日から21日に行う。新年誕生の祝い日で、太陽祭程の名残りがうかがわれる。⁽¹²⁾ ムラの中の神聖な丘の上で、正午を期して男と女が新しい気持ちで祝う行事である。むろんそのあとは寒さをしのぎながら神殿の中で酒宴がくりひろげられる。

②ジョシイー祭 **Joshi**. 3月20日から3日間行う春の祭典である。山野の花で華縵がつくられ、友や親類に贈る。ヤギの肉がこの日の宴に供せられる。

③ポール祭 **Pool**. 9月19日から3日間行われる秋の祭りである。この頃にはブドウが熟し、木の実はいまよく、しかも放牧に出たヤギがもどってくる。しかも経済がやや安定してくるので結婚シーズンになり、又集団リーダーが誕生するチャンスでもある。

④オーカル祭 **Oocal**. コムギの収穫の際に行う、小さな前夜祭である。も

ちろん酒宴はついてまわる。

以上数例をみてわかる通り、四季の変化は一つの動きであるとの自覚から幸福をさらに深められると考えられている。そしてその自然が新しい期待をいただく絶好の機会であると感じている。

(12) ローマ人が12月22日新年を祝った故事との様式比較宗教学からも一考を要する。

○次に、その葬制について報告をしよう。

まず埋葬方式は土葬である。木箱に密封し、その埋葬時に平たい大きい石をすえる。以前はゾロアスターのように鳥葬を本流としていたが1968年以降、長老会議によって禁止した。死体は着服のまま埋葬されるが、とくに女性は頭冠や装飾品をそえて葬る。また妊娠中の女性や月経期間中に亡くなった女性は、忌みの思想から墓地の片隅に葬られ、しかもその作業は女性達だけの手によって施行される。

○カラシュの文化で特筆されるものは工芸品である。誰でもこの生活や風俗にふれば手づくりの木彫品がもっとも印象的になることであろう。この小さな共同体もその自尊心を満足させる手段として、木彫による祖先の肖像彫刻を発達させた。そしてそこにほどこされた模様は、持ち主の地位を表わすほど、社会的に発展した。これらの肖像彫刻はほぼ三つの型に分類される。

①等身大の肖像

②乗馬の像

③双頭の馬にのった肖像

である。祖先が馬に乗る—というスタイルは、これもインド文化によるスールヤ神の信仰に影響されていると考えられる。

肖像彫刻は依頼して制作されるが、明らかに氏族体系の文化産物と認められよう。その保管場所が室内とか、神殿内ではなく、ムラの一隅、しかも隣村へ通じるコース上に並べて置かれることは、その間の事情を反映したものと思われる。

なお、これらの木彫は、高さが2メートルを越えるものもある。

現在ペシャワール Peshawar 博物館にカラシュ文明のコーナーがあり、家外の建築装飾と共に常陳されている。

(1983—3)

○この報告は1978年「東西交流のルート調査」の一環として行われたものの一部である。

パキスタン・ペルシャワール市より西北のチトラルを基地に、周辺の史蹟調査の折、カラシュの村に入った。チトラルより南下途中ジープを降り、徒歩で峠を越えると、クナールの溪谷の一支流に入り、カラシュのムラと扇状地に展開した耕地がみえる――。

この時の調査を通じ、のちにイスラマバード大学 Isramabad. UNV の I. J. Afghan 教授の助言を得て概念をかためた。

この種族に対する論著は極めて少なく

- | | |
|---------------|---------|
| ○ヒンズークシュのカフィル | G・スコット |
| ○ヌリスタン人 | S・ジョーンズ |
| ○アフガニスタン | N・デュプレ |
| ○チトラルのカラシュ社会 | I・アフガン |

などが主な論著である。

(神奈川歯科大学講師)